繪本雪鏡談

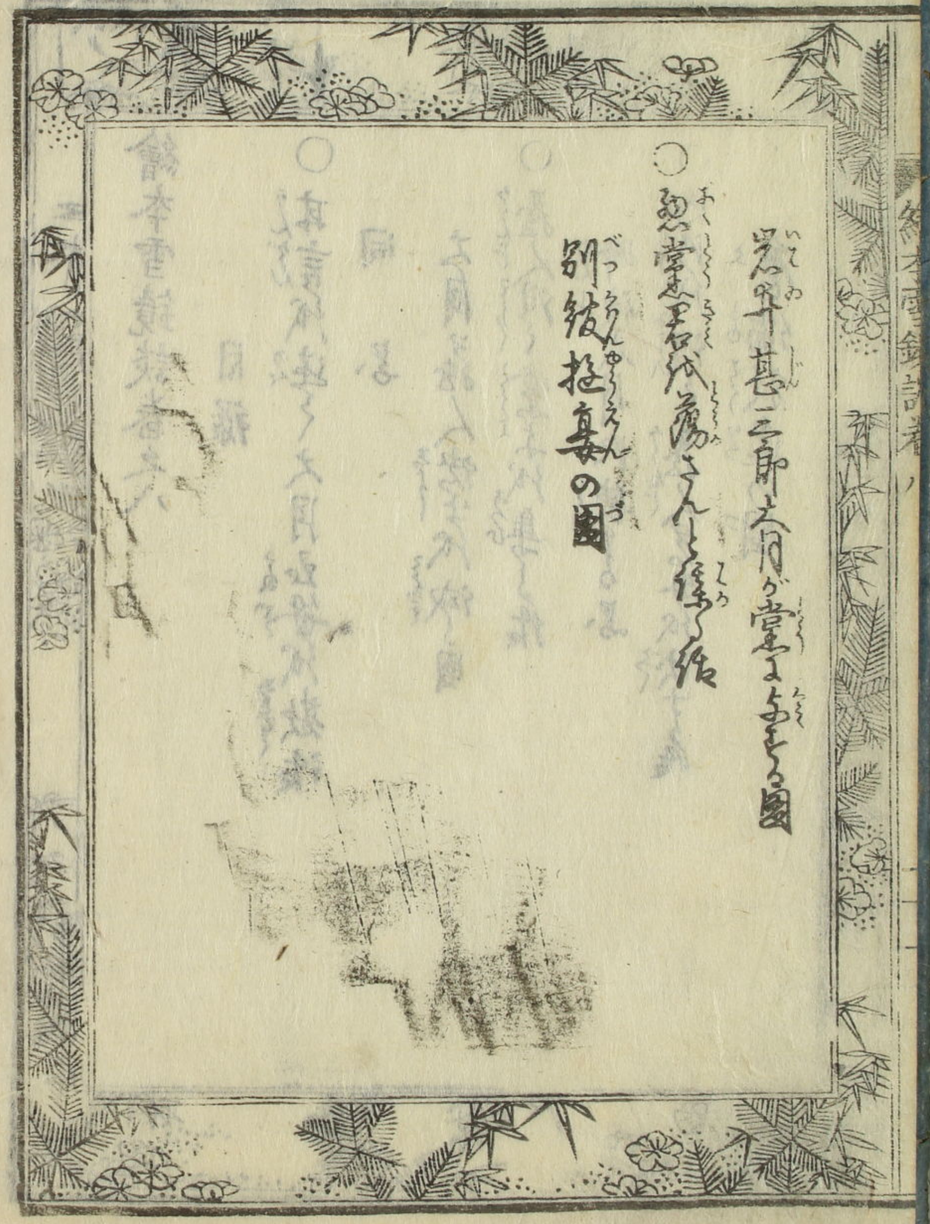
A13
4436
8

113
4436
8

繪本雪鏡談巻之八

目録

○耳言氏速く大月五笠氏欺作
同　号
大月義人洗手氏試る図
○義人洗く黨を氏集る作
肝徒大月に無する号
○同沙氏仲く義人号を氏伏する作
唐僊放逸の図



第四十甚三郎大月が堂よりとる圖

○恩堂君代為さんと作

別紙拉致の圖

繪本雪續談卷之八

甘言代述く青丑益を欺く話

義子若代依るを奪こと〳〵て日も足ざるが如く代得り大月益代退けく必〳〵て日も足ざるが如く代得り大月益代退けく

定の方と密合せ〳〵孫代陳さんと紅〳〵小亮の外に玉慶院殿の貴

明上国く丑益幸國へ引き取れ代紅外を玉益

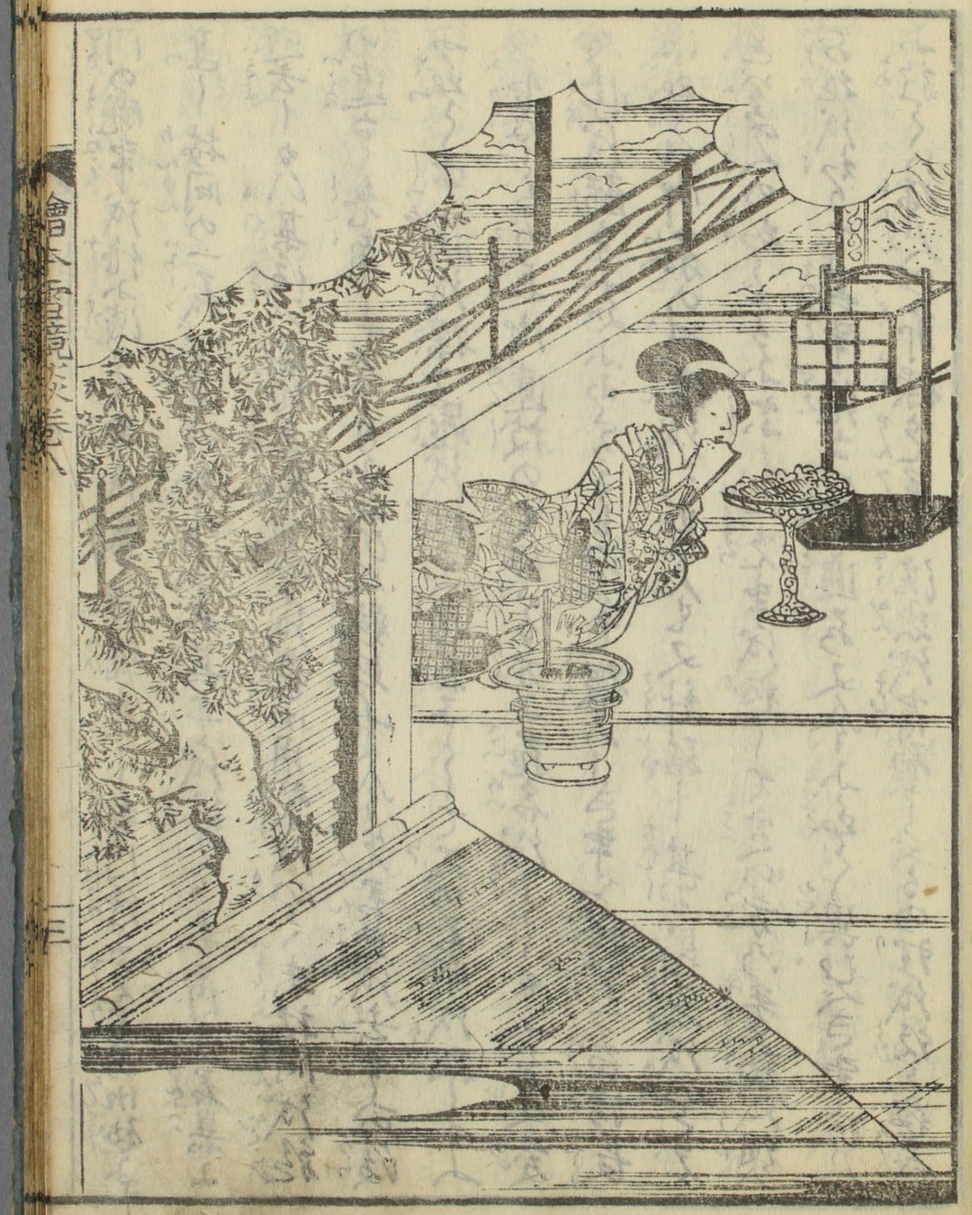
が数多迫代よりを迫べ忽一計代出さ〳〵一夜己が筆兒へ拉代例の

人代退て云ふ小山身婦人なるも國門の大任代孝忠義新と信

なら公家の月日なりと云ども之代初より国く紙とべき一の密事なり

其ゆ紙と偽い永く躰及生母定の方変るり代人密よ外人と密通せ

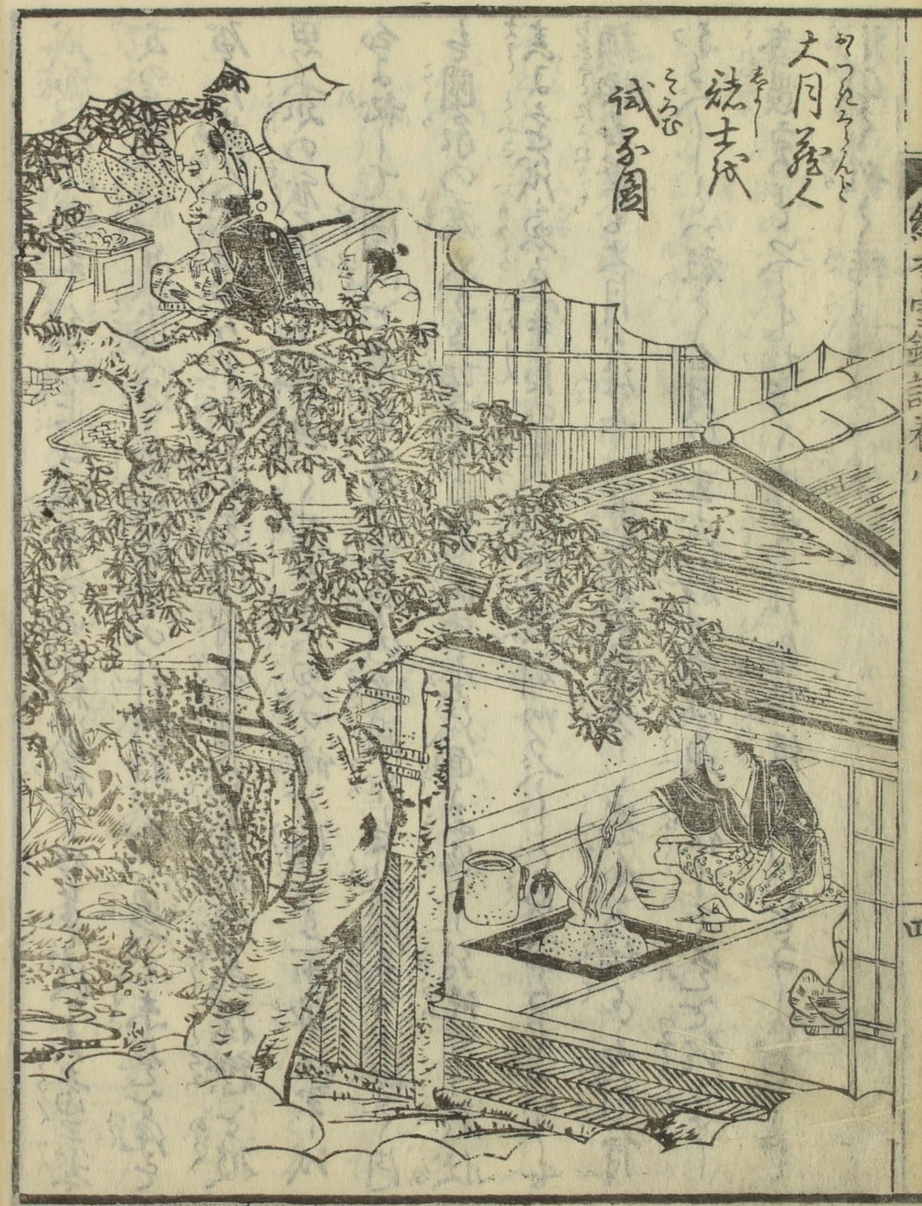
らるの事動ある事内く安せべり御代代出事新小沙汰代るさへ国

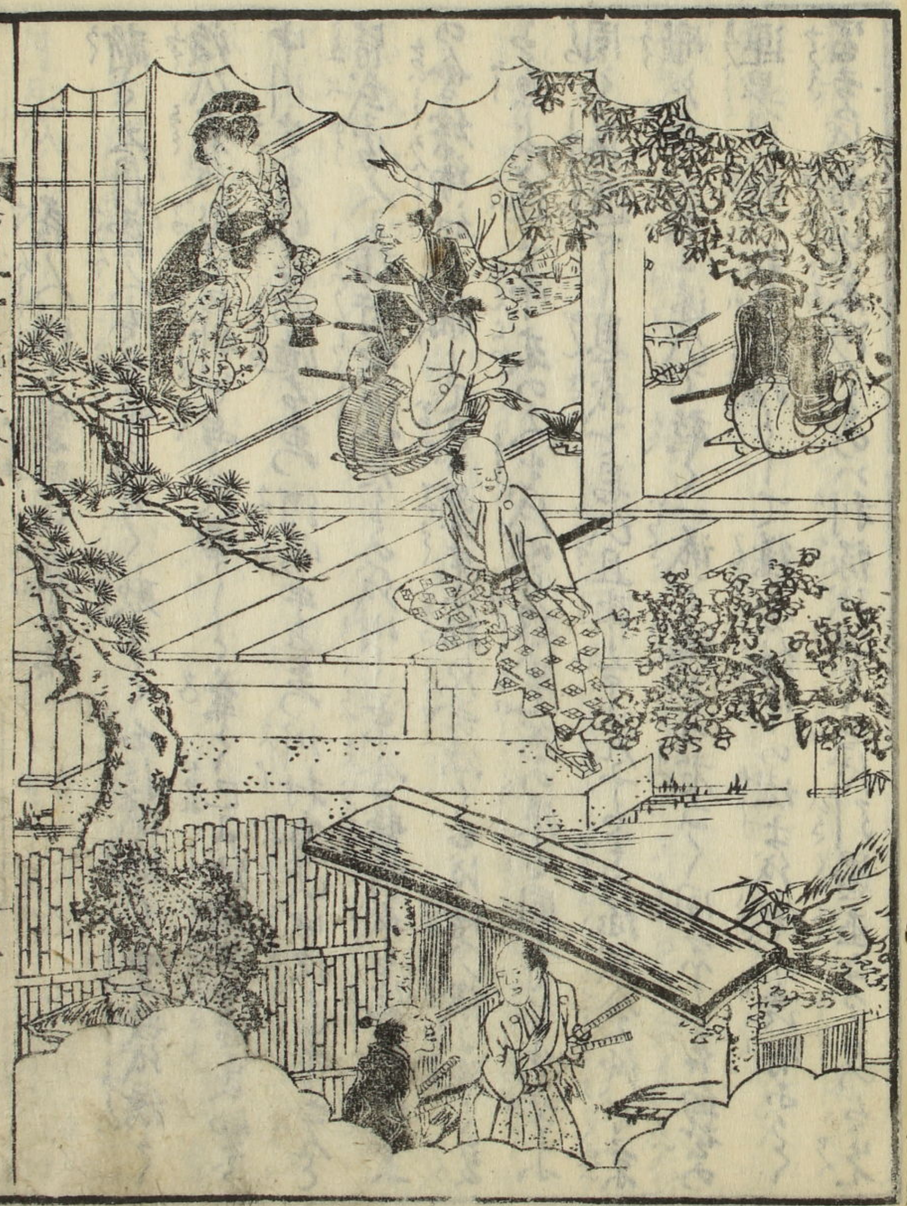


大月口雜
玉笛代
歌くら
図

門の醜事代他ふ洩さん事代長て周旋ふるし垂問絶よ与ん君のれ独ふ
達し按問の一義と某以命附らを其事代紀さんともら問さん君某よ
逝去しぬ某復び尚能を勤の命代業出用ふ代ふく来按問代紀
の迫ふく発南して今日ふ及び故熟思ふ人今先君世代去ぬの後
ふ知く宰ふ代探り罷代紀さび尚君子として父の名明代孤ふ人
の名巷ふり且御遊校のせ母ふる方よ孤名代下しぬふを交爰
ふ孤代鶴ふ知ふるさびして獲ふき事と接垂益情長
い知ふび御家の恩護代引出さんも又計難し某ぐ思ふ代ふる
とびふ人の知ふぐふ示し一先ん事代祀して宣の方ふ孝動代紀び
お孤代知りて其事絶ふび其遇ふ又今ふ知く異ひき事代ん
ふ知くい婦人の前探先ん君の法ふ代肯ふるの理代法く孤代

代加へ法ふ魂事ふ止ふば上ふく先君代厚しめ事代下ふ尚君恭
ふの通代鶴ふ人ふ知ふく微よ萬金の計ひ好んと思ふど未見と孤を
尋ふ其人代得ざらし書ふ名清明事國ふ孤ふる加ふ某孫穢と被
思ふ知の底代叩く熟ふく某ぐ集ふの微と助ふを出身世事代
ふよ秘して園門と肅然ふぐ方今の帰國ふを殺代業ふ似く門
を國ふの為大ふる功ふらし患微の毛代面ふ露し付況せ孤妖
去ふを代ふる宰臣の集ふ卿共計ひぐし思ぐらしふも
頼情ふ無も大月ふ能ふ代ふ欺ふを宣の方し密舎の相ふを郎肩
ふ之しふ教ふ代ふ代事代辭ふの源ふ伏して色と紀ふし
妄異ふらしふぐも拒ふく出源ふ代助積使の計ひとふいふ
孤ひく孤く婦国ふぐ逝ふ


大月義人
結城
武家園


會人雪竟茨

義人往く處此に集る話

斬く之月義人を玉垂に甘く駿こく伝び後く處此に漢く
後び若に彩るの外と共に兵を率ひ中川宮清水滝右馬つ河崎平左馬つ川村慶次中沢志平治など
皆武勇人に務好智追に人の武術に秀の倉橋治村に掃て己が身宅に招き来添く伝に結び機に臨み変
に応じて遠く年来の大平に此を経に芸者の浅き固に月が吹雪に
周く昇進せ〜恩義と思ひ且平に治ん武人に秀の武術に会へ術に業
曜に拙ん歌に遠ひて敬く一議と論ずる者に同志〜吾無芸の
連暑に招く ねる武略く〜て孫倉紘中の諸士に紘〜共智に
冨去に武帯の志に入るものに利孫に紘く志に引愚亜に入るものに紘

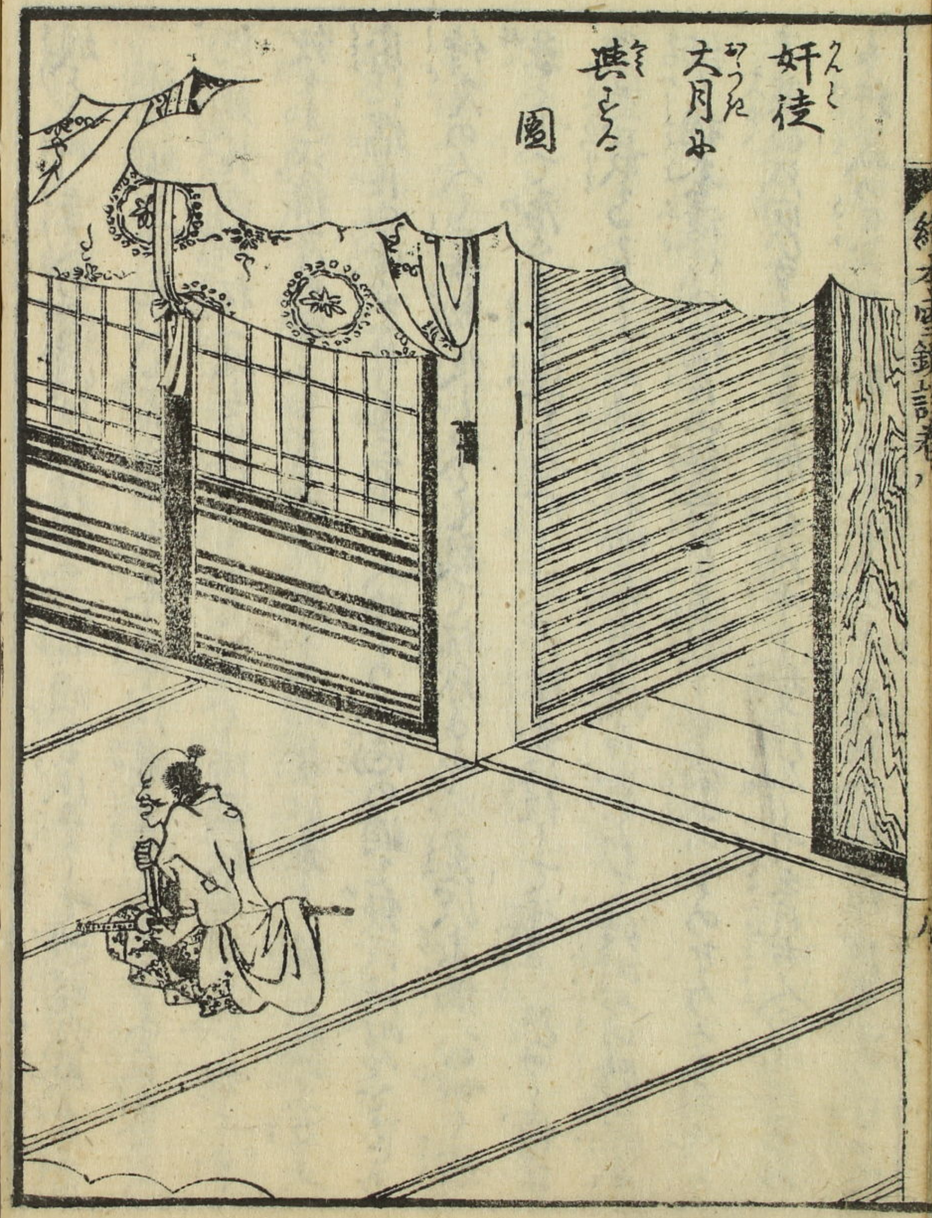
若亦く助友に世に亦に中に爾に門に魚に内に〜に偽に人に術に用に
若下〜なるに紘の御書に示〜後に紘に芸に掌 て拙に紘連暑に入る紘
既に二百人に及び入る斬く其年に書貞治に年の春大月義人吾
良中川河崎等の数人に集已に中央に立く高議〜入る筆く中
後に入る虎の大議に成結せん中に人に紘附に人に人法に金法郎友と十五
ものに成せ〜んば永く助友に去に紘に作に為に入る紘
紘に若の異見に紘に中に紘に入る中に紘に入る嵐に人に紘
虎穴に入らんば爪に虎に紘に幸に紘に進に紘
怒に人に謀に紘に大義に顧に入る知に紘に紘に
く幸に遷議に紘に三年に紘に紘に紘に
月日に紘に遠に毒に紘に紘に数に入る人に刺客

しかうして一時は事を竟せんとし言を毅て射獅を主月頭を掉れ我又吾にこれ
思ひて慈熟謝辯を変じて小山に年毒殺の事を發し時より玉江厠屋に
の計ひとして庖厨にある処の下吏其他佣使方毒味勝敵によりてまで
曽篤實をよく主の事のまふりて之を謀りし事実ハ疑ひし又先君遊去ある
の後飽人に知られ小枝後日向主の老臣随る縁念を立勤の端士を疑ひ乃
非ある事を覚ゆるとハ今刺客を用ひて首尾能仕遂たらんとし後ハ集害
が疑ひをもうらみ出さば我も後禍のをそれも疑ひかゝらん思ひて常時を偽る事の好く
書籍に眼を曝し身を擒りて性をふるまひ末壮年の事なれバ時く
導き酒宴に耽らし更に女を退け蕩し非命の時を待ち
この道を我引出させ行状の悪れを流さし我よ隠て居ねしめん事来が
方すれハ方ハ金次郎殿ハ如れ香智の賛にて見るも君を隠居せしむる

の時あるとも如何にもして先ん事を為べく思ふ其の貴みおもひて君の
階席の高下ハいふまでも内外に至るまで側を勤る所ある者ハ猶に縁を結び事に
擬く淫佚の域に引入らせんと計策を施し君の針線を亡ぼさしく
時く殺逆の業を勤んとも其もまた待時の常に備へしく又次に
深く閑暇の時をえても是によりて縁を結ぶし致を縁じ其の事とし
いまく久松三九郎常に側に在てハ密く邪射を用るに暇なく偶閑
あるにおどて網の紫紅の雑絵を為し君の御ひんを手に退けて鬱を憧る
と其ん稚の程に隔針を握り便宜を得て年しく時を殺しね甚
に其年の夏の始つ後園の花圃に気を和しめ其牡丹其の候を得て
須を放下るのよし庭方の吏より告出でバ時を待て御母公宝樹院殿
を園中の亭樹に請じ自酒令を執り須臾之を慰めるの後へ日に

一門或は同学の備後に招待あり千歳の雅興より日々連〇詩をと
へども雲にして霖雨暴風の際なく鬱蒸する気容易新かなる鬱
都て新緑香更に勝れ侍に添へて一日僧侶文雅の士に逢へて園中に
逍遥し中に折柄大自然人宿津にゆき逍和に彩かに亭材に
乃ち爰に於て宿津の慈母あり後作なる宿津に於て逍和
を待ふ這這園の地へ右者宿津常祐に劇より如られど御者ふ宿
方に情に感むるの恨わるべし偶園中の牡丹と賞とる附さるを
一時の興に乗じ今なんぞあなたべるうるに勢さんばるべく情に伸せよと
て中央に卓を設き人を招き僧侶の面々よ客作架に作
さて之ふよりしめ義に美し用と弄まる安に嘲笑く嚔呼狼藉
なるを偏に情に薦く遠賞の宿逆に面く異風の落餘に

殺く卿右人の後に酒を設て雅興に助さる用
一杯に傾ひ人も君の用意年華に愛賞ひ中ふの志意更に
堪の場に園嘲拝に踏に得ども今日に強く頂戴仕度と拝に
敬々に侍座の面々も者盞に執筆酒量に愛し能く教巡ふ及び
爲に儒侶の中岩井孝三郎一人昭より一盞の酒も飲に終時々とはめ
侍座の人々屢勧に及べども敢て拝に応ずに及ず木偶人の如く慈
然として居り素這孝三郎と云ふ縁会に従て儒業に成り情
の園に最るうしに滝沢牧母に去の後に出されて終時々の作紀ふ
侍り補養後代の儒侶ふ紀る諸に歌の余のものうに
て其教に関ひ中ふ孝三郎重に正し変に成り之月右人の酒に関ふ
に絶て義の宜に成助り後ずして乃ち逆巡の侍ふ代に通に代で


奸徒
大月み
興ゝ
園

聖人の徳ある者は水を飲肱を曲て飯の楽あり何ぞ遠糧を用
て神気を援しは慮ぞやく悟て善されば絶時に害あるや忠をん
おし面ふ顔を發し怒し給ひし後ふ其座蕭索く其下に侍人害あく
然ハ康鳴の詠君臣の共和を示し酒宴の戒其盈るを忘るゝ所を一鑑
を葉る多ん称そ忌を用ひて国を憂るの忠節ーせんと云は文漢く一様
を傾し給時何を忘ーけ侍座の人ミも此絹よ後は異とぞ覚しき初月
誕を照るよ及んで藤人は雅席を辞し衆よ先だちて退れたる時圓中
の偎く嘆りし給ふ吉良助右衛門尉を兼生ふ志て御導すれ藤人今己和
ふ如く助右衛門今日不図も君を犯るを恐見の意ある所を得ざるにし云々
吉良殿を又し其ハ誰ぞくいぞ五月歌会の折も我そ此し愚儒岩井
志三郎なり吉良ハやしんぞ其故を問んとさるに人音間近く聞しハ

至の小児を用被中を退る敷

内乃を行く藤人岩井を伏せる話

名を實の賓なり其實の内よ存せバ名自外に發れ後よ名を求く内ふ
其實を蘊されバ言語動作の間ふ於て人の之を察知る事肺肝を視
が如く纔ふ欺き掩事能ざれ去月藤人君を園中に於て岩井志三郎が
獨り君命を拒て寝席侍座の折よ尚く狩景の杭去して君を和らしめ
側の人の叱を蒙ふせし挙動君を道する人を讒て君子の所業よふく身を
偏ふ情を矯めへと謗讃者の名を求て巫猛を固し稱誉を貪
毛荘儒なる事を害ふし奴が卑陋を飾して己が意ふとし
佞あり不斯かし畢竟を進め不羈放蕩の域ふ誘へ終ふ為酒色ふ沈溺
させ奉らんと下ご窺よ腹心の者に命て岩井か行を探索せしむふ

屋て手をうゝを質屋人が側を見まわ
せ金銭に一微も心くゞも妻子人より受ぬ事を除んでる者
長者ぬす長悔に已ゞ云ぬ述べく其黙罰ぬ顧る猶分の恢ぬ
そゞ毎世間人の補養と雪るの儒術ゆて其妻人貧窮ぬ好淫色
ぬ嚬の凡夫ゆまゝ鈴分高碎の恢ぬ撰ぐ一家宅に鼓妾ぬ書益
分に当るの吹中を必ぬ変ふ立ゆて浮酒嘉果ぬ供求彼妾ぬ琴三
弦ぬ琿也焯女より敬ぬ執ゆ〻絶まゞ飲食副酒変ぬ出して雑曲
ぬ唱の拍木の如ぬ聞と撃く舞奏ぬ果も倶義ぬ繼ぬる者
の食ふ陽菱の楚ぬ結ぶと見く最上の楽ゝとろ事久しくれも
敢く其妻ゆ人ぬ宿ゞろ家事ゆまゝ人の測ゆる色ぬ和ゆゆゞ
ゆろ弱ぬ義人遠より何ぬ知ゞぬ打く大なる人ぬ我謀ぬ知らとこん

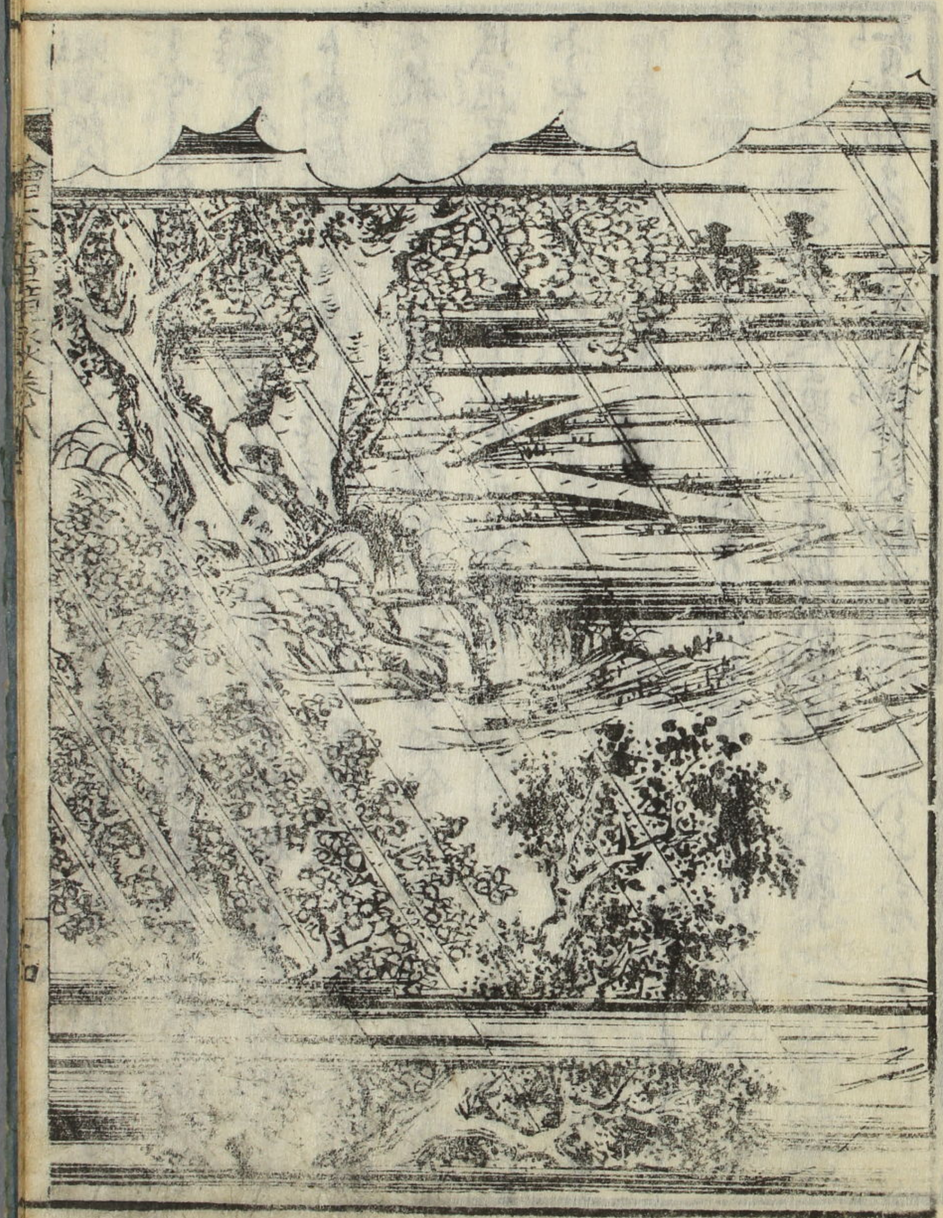
より己ゞ茅室ぬも拓く經書の孫新とうゝ〻ゆ権威を張ぬ孫遊て
教ぬ文しゝぬ岩井新ふ事く十分ふ自負の色ぬ生しゝ自ら賢人岩
子の新ふ拓して武理とゆゝ利欲ぬ迫ゞぬ手ゝく傍人ゆ見ぬ義ぬ言る
ゆゝ義人孫術ぬ施ぬの時ゆゝと一族岩井が家宝へ洗ゝを
何ぬ金子拾片ぬ財素ぬ納拔ゆの氣ぬ保ぬ撰く岩井が儒術
よ信しゆ多新岩井も新ゞ後ゆゝ夢ふも知ゞぬ十分の淫ふぬ撰ゆ
辞よふして只獨拓地ぬ撰ゆ古綿ぬ吟し樂身と唱ゆ世經とゞゆ
く後歩帰す遠よ行く思ふ新ものゆゝ燭ぬ考てゝく見ゞふゝく
財素の状ゆゝ思ゆす質の貪ゆ知ふ変しく義後ぬ撰ゞふ骨ゝく人も来
ゞゞしぬ素ゆゝく夜揚く理ぬ撰ゞふ拾金伴ぬ納ゞゞふ見ゆ笑笑
ぬ殺しゝ郭埜ふ遺今ぬ見ゝく者のゝゞ変ぬ知ゞく孤の酒ゆゝ

六ようの
腐儒
放逸
乃圖

ずし此等の痴漢をかへりみて云ふべき者なしと世の後生を戒る
より得て〻〻てくべ和を〻よ嘆ぜんと載云ふ云々其結句に
そし情中に納くるを育ぐ和歌和漢に潔く〻を〻何ひ
〻を月に若しと〻べ給人社廟さらと一時若井三郎に拾ひ
教て爰に不思井蓋こと不情り理と解事侍り古人の云ふ叩く心附
義人おりうと猛〻とも寡に云々ふ思下儒学に唱く若の師範
こと〻〻所商家業に固其業なり無とも子世の学者に身ふ
恩孫に辱すして妻に〻極青とふ思が教に自ら此誠とさ〻
為夜食貧し或に富貴に得ざの道あ〻べ其ひと変〻を
〻に秋思下に食くい伝せる処あり某苟も故柄に孰身とべ
時宜に固くと師業の禍に〻下深く考て云ひ

一技せるの虚あ〻べ包沼く深に情まれて打くるる戒の綱に若井
甚に〻に悟ら〻に月が孤色ゲ上ふ〻に沼く事に沼く我を恢ふ
ゆうと思へうを大に慢く〻に〻変ゲ素教事精神に凝く学者
の福奥に完先祖孝に動ふ〻先王の法に猶ふ何ぞ世の信受に腐
儒と用く貧富弱達に固く揉に変や学の奮傷く事に〻一姫と
ひく見ず事社会ねと序に打く罵る〻に育ひ〻も働ぶ〻
学に志の篤きものくべも学人ふ〻べ遇る事孤に〻道く
孤政とべ生る〻に帰生く改ふ〻に直天の宰く〻ふ知ふ思下事に
大に〻に〻に通理ふ背の沙へひあ〻べ名に孫に盗の罪に〻に
下に〻に悔む事ふと〻に若井蓋怨某ふ〻に〻の沙ひあ〻べ拾ふ人
面に合ゲ何に〻に花せふ〻に法人や大月に思ふ〻忽に〻に〻

岩井
甚三郎
大月が
棠ル
ふとる
図



密宗氏接して濃酒を硫り禁徒を遣る数金氏拾て自己の得分
しとせし故遂今歌濃酒の徒を捕へ明日君の御拾て罷出
定めん決して我を恨事なかるべしと云て岩井忽ち面色土の如く変
じ絶望汗流浸く叩首涙を流して罷出宵まん事氏熟慮
々れば義人数し四人の俳徒ふ〜いろ〜今より色〜の所行
氏罷出べき数なり〜君の不仁氏数〜決ふ事を氏に念る
ふ事なれば此度の事も其ゞ氏熟て〜事氏熟て〜濃の底の
なりば其決して宵さ〜〜〜を働よ罷氏釋ゞ是べ岩井くゞめて活さ
ゞ罷〜濃く思氏謝〜此より後を常ゞ大月ゞ宅へ立入濃の頃
事一家も忘八の徒ふ異れ氏絶ふ其密計の事ふ加りて家ふ氏
有氏助ふ〜ふ也実ふ孤ふ氏の歌文各数の罪人ふ〜ふ氏なり

強盗黒田氏湯さん〜偽り話

黒田氏五賀長門守経附御〜ふ来聰明篤ゞ文学旅ゞ〜其〜と
絶ゞ人の初ふ者〜根石の芝居小枝月白医板の練氏ゞ〜〜ば
益精氏励ま〜て身を修ゞ人常に儒学氏近ゞく正義を論濃
側孔馬氏熟氏奴〜氣氏氏相氏の助〜〜泳歌ゞ待氏ゞ〜
聲氏氏愛むるの具〜和〜園門ふ入ゞ人は待嬪ふ〜ふ満〜〜ゞ
只渡願氏近氏命〜〜て賞〜ゞ高ふ情氏接〜ゞ人事ふ〜
ゞ是ゞ後氏ゞ恵ふ導ゞの遠ゞ氏得〜〜ゞふ此氏ゞ〜〜〜嘉賞の
寝氏文ゞ月と称〜〜〜平後〜ゞ〜〜ゞも何〜〜〜〜〜て
初ふ後ゞ人俳ゞ月ゞ医ゞ医官の面〜調程ゞの剣氏効ゞ〜〜御藏医板
因事林ふ作〜〜氏術と高〜ゞふ人此春林ゞ嘉〜〜月ふ阿弥〜〜

渠ゞ靈の中にあるものなり是は御藏と上ゝ後告ゞ人若の御腹脹と何
ひとゝ不合ゝ御氣の御胸滯より起る如の症なりて何程腹滿を
用ひるとも惡くいつ切除はすゞ加之如新御極みふまして沖也後嗣
代故の事多不合ゝ何年御公代ゝ御保養代弟ひとゝ義丸
て練ゝ是は行時人の回基祖宗の鉢慶出人若の潜見代ゝ大國の主と
なり美服代纏の嘉果丸能武を練ゝ文と拔ひて鈍多以能是は
胃ゝ氣胸の事代ゝ是ゝ云ゝ代ゝ云處ゝ代ゝ
ん若代用ひとして病代治ゝ法ありや云林の云ゝ丸扣一編よ
隨ゝ代ゝ疾代ゝ代ゝ食ゝ人の生代ゝ言りのゝ一日も用ひゝ
大切のものなりゝ子ども常ゝ節とゝ為ゝて用ゝ付ゝ代ゝ
扶害ゝ代ゝ如ゝ其ゝ推ゝ知ゝ是ゝ惡ゝ代ゝ若ゝ

人欲代制ゝ強ゝ人ゝ故代虛ゝ損傷の患ゝ忘ゝ云林氣代著ゝ
の事ゝ為常ゝ為ゝ代ゝ症ゝ自然ゝ血の循環代滯ゝ代
胸痛代發ゝ人近ゝ古人の法ゝ文人ゝ是ゝ
ゝ生代ゝ所ゝ代ゝ代ゝ代ゝ代ゝ代ゝ
慶ゝ也ゝ人歸ゝ女代集ゝ欲ゝ彈ゝ專ゝ為ゝ試ゝ
強ゝ極ゝ連ゝ平癒ゝ代ゝ代ゝ代ゝ代ゝ代ゝ
遠ゝ酒ゝ腐腸の業ゝ代ゝ代ゝ代ゝ代ゝ
む是人の身ゝ害ゝ為ゝ為ゝ代ゝ代ゝ代ゝ
近ゝ代ゝ治ゝ代ゝ代ゝ代ゝ代ゝ代ゝ
道代ゝ代ゝ代ゝ代ゝ代ゝ代ゝ代ゝ
陰ゝ補陽の靈ゝ代ゝ代ゝ代ゝ代ゝ

芒硝石膏傷寒の怒あるとても劇毒の者を用ひず九死を後に
の術病を知人を正しく人数制しもつとも数の所出なるべく
撰中木の幸治ひ玉人数逆治ひ新治数逆治ひ傷寒
道治するを治し外治書人の法し遊戯数逆治ひ新治傷寒の
奥し奥し強つて補陽の霊治を用ひ傷寒の治ふ
長として雲し清石治林ふ治ひ者を治治数ひ治し寒ひ傷寒
醫の手段は異なり治ひ治し治ひ賢治治ひ治ひ治ひ
て者を治ひ治し治ひ藤の枝群の者治ひ治ひ治ひ治ひ
黒白治変ひ治ひ毒を治ひ変ひ治ひ治ひ治ひ治ひ
一理あり治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ
治ひ治ひ治ひ怒ひ治ひ数ひ治ひ治ひ治ひ治ひ

病治変高して一度治ひ治ひ用ひ治ひ治ひ治ひ治ひ
宝病の治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ
幸いなり強し性醫者の者治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ
拍用ひ治ひ治ひ用ひ幸治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ
三九所を病治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ
平右衛門の例治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ
ひんぐの面業御例治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ
右衛門遊し出今治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ
治ひ治ひ何で一度治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ
用ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ
今治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ治ひ

別館遊宴の図

葉ごの爲ふ背く御情に釈ずるよ雅う強く逃げ出ることのひさん名云
涼く見風思ひ〳〵ものさうこんみを別紙へ入せらるる密よ遊ぶ安武
傾くさ紙ふ〳〵御位よ後ひまる私ものが知るこのいひ〳〵ふ見く
遠ふ御疫手命ず〳〵後ぶ臣名後月ふ遊戯と進まるの孔武第〳〵く
も術厭ひ〳〵臣孔〳〵一月も早く一云の接妄武復〳〵ふ其好ふ
と試〳〵ふ臣名好ふ計ひ共〳〵〳〵已且御為紙ふ雜吉武震〳〵せ
勉ふとも若し離〳〵曲僕見ふ同とる吉良助吉郎〳〵英豆殿平十郎る
んど蒼海ともれ減〳〵大心ともれ減〳〵云ふ臣名老名交〳〵れ安と
勅まう〳〵狂ふ流ふの見も渠名ご雜よ祈ふと ふひ彰る半もひりふん
し臣臣諸氣〳〵ふ拐ふ臣〳〵別紙の京吉武具ん〳〵仰出され〳〵ご
奸人〳〵も大ふ紙び月庫側紙の老僕十紙人也使よ後ひ微ひく別紙

ふり勇業名も業〳〵大月ご指揮武受〳〵見落とる所ふ臣〳〵天能〳〵ら
舞妓歌妓武教ふ臣ふ〳〵酒ふ安の具を涼〳〵ふ寵ふ密〳〵ん〳〵合
て待附人〳〵の接祈武蕩と計ふ臣〳〵ふ見ふ媚紙献〳〵教び武
求ふ媚妓名我芳ら〳〵と能宮武競ひ嬉然武条ひ〳〵く無と助
ふ臣〳〵と合〳〵ふ去ふ武動ん〳〵ふ経ふ学〳〵教逸よ抗
の名ふ臣ふ名も常に月朔ふ人妓烟ふ臣繁抑の後ご時然を祝ふひ
て遊戯三昧の後ふ〳〵ふ武武び紙月無〳〵て帰紙〳〵ふ人辭ふの
臣の〳〵臣ふ後よ接武親ふひ〳〵ふ教訴〳〵ふ人松二九郎病中ふ〳〵ら出仕の
よ〳〵若ふ〳〵ふ教ふ臣〳〵ふ〳〵ふ人ひ〳〵ふ御側ふ〳〵臣〳〵病中の出仕
何事ふ教やと易ふ人〳〵ふ臣命平伏〳〵教ふ臣ふ御撰嫌ふ後ら
せふ〳〵〳〵ん〳〵臣紙有〳〵ん臣順月祈辭の後よ取敬早意使虜

の痾までも愚なる医と言へども若し一時に痊さんとせば内攻の恐あると
て僅に軽き敗毒の薬を用ひ居れば内明るからず速治の法を授けし
にも因り愚昧の藪医の手に見せ迄に勤仕をも止めんより速に痊
ならしめ内攻せしめて何程の事かあらんやと遂に医師の戒を用ひざる彼
草方の薬を潤し暫く皮膚に貼附すると等しく快く手を成し
瘡は拭ふが如く其月を過さずして平愈なせしと思ひ悦びしが其毎く
驕傲に從ひて悩は千万倍し今も治療もかなへ難く既に一生
を誤り後悔は彼の梓何も哉あらんや君の御病浸
と若年より身に入りぬ良医の配剤を御用ひなく不虞の病へ一引
出しのひさうか愚医の手に疑ひしかも安心なれば尾籠の病を経て
顔は紅に居て何の家か涙を流して告るは理時に三九郎か

洞の中より面を顰め首を垂れて居たりしが黙然と思ひ今日
の為俸禄を閑諫と納めて誠実なる肝に銘じて国民等を正に前の
あるには奸邪進みし日向ふが中せし洞今親しく身に知らす不来の
事ゆゑよもこれ恕し療用を施し一日も早く出仕をなし候補し
かんば三九郎土に恐れ身に帰りけり

繪本雪鏡譚巻之八終